



Title	マイクロナノパターンの表面形状がヒト歯根膜線維芽細胞に与える影響について [全文の要約]
Author(s)	工藤, 円
Citation	北海道大学. 博士(歯学) 甲第15489号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89524
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Tsubura_Kudo_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

学位論文題目

マイクロナノパターンの表面形状がヒト歯根膜
線維芽細胞に与える影響について

博士の専攻分野名称 博士(歯学) 氏名 工藤 円

歯を喪失した場合に用いられる歯科治療の一選択肢である歯科インプラントは、違和感が少なく、機能回復に優れることから、欠損に対する補綴歯科治療として広く普及しつつある。歯科インプラント成功に必須条件であるオッセオインテグレーションが成立したインプラント表面においても、天然歯における歯根膜がないため、上皮ならびに結合組織による封鎖性が脆弱であることから、細菌感染が生じやすい。天然歯における歯根膜、すなわち結合組織性付着に類似した構造をインプラント体表面に獲得することができれば、臨床において大きな問題となっているインプラント周囲炎予防につながると期待できる。現在、オッセオインテグレーションや結合組織性付着を獲得することを目的として、ナノインプリント法やナノリソグラフィーにより製作した規格化された均一な微細構造を用いて、さまざまな研究がなされている。先行研究の結果は、マイクロ/ナノスケールのグループ、ピラー、ホール等の表面形状やサイズが、骨芽細胞や線維芽細胞の細胞接着や増殖に影響を与えることを示唆している。しかしながら、グループ、ピラー、さらにはホールという異なる3種のパターンを同条件で比較検討した研究はなく、歯根膜細胞に関する報告もない。歯根膜の再生、さらには歯根膜を有する歯科インプラントの開発には、歯根膜細胞の表面性状による増殖や配向の制御は重要である。本研究では、材料の表面性状（形態とサイズ）が、歯根膜細胞に与える影響を明らかにすることを目的にした。

材料として微細成型加工が容易で生体適合性に優れる *cyclo-olefin polymer*（以下 COP）フィルムを使用した。ナノインプリント法にて製作した様々な形態とサイズを有するパターンを COP フィルム表面に形成し、パターン上でヒト歯根膜線維芽細胞の接着、増殖、ならびにコラーゲン産生について検討した。加えて、各種パターンをラット頭部および背部皮下に埋入し、材料表面における組織反応について検討した。

各種パターンを付与してあるマスターモールドに、COP フィルムを被せ、小型熱プレス機を使用し、それぞれ、幅または直径 1 μ m, 5 μ m, 10 μ m, 50 μ m, 高さ 5 μ m のサイズの異

なるグループ（溝状構造）、ピラー（柱状構造）、ホール（穴状構造）の3種類の形態を付与し、試料を製作した。得られたパターン表面形状を評価するため、走査型電子顕微鏡（SEM）にて観察した。疎水性である COP を親水化するため、卓上真空プラズマ装置を使用した。各サンプル表面の接触角は、接触角計を用いて測定した。

製作した様々な形態とサイズを有するパターン上で、ヒト歯根膜線維芽細胞（hPDLF）を30分培養し、DAPI染色後、蛍光顕微鏡にて撮影し、その画像を用いて解析、各パターン上の接着細胞数を計測した。細胞の形態は、SEMにて観察した。また、hPDLFをパターン上にて1週間および2週間培養後、接着細胞数測定と同様の方法で増殖細胞数を計測した。産生コラーゲン量は、hPDLFをパターン上で2週間培養後、シリウスレッド溶液を用いてコラーゲンを染色し、マイクロプレートリーダーにて測定した。歯根膜細胞の細胞骨格と接着斑形成は、Alexa Fluor 488 ラベル Anti-Vinculin, Acti-stain 555 Phalloidin, DAPI 溶液を用いて染色し、蛍光顕微鏡を用いて観察した。

動物埋入試験は、10週齢雄性ウイスター系ラットを実験動物として使用し、各種パターンを付与された COP フィルムを、皮下組織に埋入し、1および4週間後に灌流固定後、超薄切片を作成し、透過型電子顕微鏡（TEM）にて観察を行った。

ナノインプリント法にて製作した試料については、SEMに観察により、モールド上のパターンは COP フィルムへ正確に転写されることが示された。親水化処理により、いずれのパターンの接触角も減少した。親水化処理後の接着細胞数は、パターンのサイズにより差異が認められ、いずれのパターンでも $1\mu\text{m}$ は、他のサイズならびにコントロールである平板に対して有意に高い値を示した。SEM観察では、ピラー $5\mu\text{m}$, $1\mu\text{m}$ では、細胞がピラーおよびグループに沿って隣接するパターンへ仮足を伸展させているのが認められた。ホールでは $5\mu\text{m}$, $1\mu\text{m}$ とともに、仮足がホール内に伸展しているのが観察された。2週培養後の増殖細胞数については、形状、サイズによる差は認められなかった。培養2週間後のコラーゲン量については、いずれのパターンにおいてもサイズが小さくなるに従い、コラーゲン量は

増加し、1 μm のサイズは、他のサイズに比較して有意に高い値を示した。形状とサイズの異なる COP フィルムをラット皮下組織に埋入した結果、1 週間後では全てにおいて、パターン上部にマクロファージ様の細胞の集積が認められた。1 週では、明確なコラーゲン線維はパターン上には認められなかったが、4 週ではグループ 5 μm のパターン間に太いコラーゲンの線維束が観察された。

以上から、パターンの形状と大きさは、歯根膜線維芽細胞の接着と分化に影響を与えること、皮下組織の反応に影響を与えることが明らかとなった。